

「贖罪の脚本」は頑健たりうるか？
—支援とナラティブの社会学（1）—

埼玉県立大学 相良翔

1 目的

本報告の目的は、非行からの離脱 *desistance* について、自己物語 *narrative* に焦点を置き、考察することにある。近年、非行や犯罪からの離脱が専門家によってテーマ化され、議論が起きつつある。その一方で、離脱に関する社会学による実証的な研究は一部を除いて我が国においてはほぼ行われていない（只野ほか 2017）。だが、非行や犯罪からの離脱について社会的な課題として検討していく上では、離脱の要因について量的研究をもって検討するだけでなく、非行や犯罪という経験を自分の人生に組み込んでいくプロセスについて質的研究をもって検討することも重要になろう（相良 2013）。

2 方法

本報告では、更生保護施設 Z（以下、施設 Z）に在所していた A さんに対するインタビュー調査から得られたデータをもとに考察する。A さんは調査当時 20 代前半であり、2011 年 7 月～2014 年 8 月ごろまで施設 Z に入所していた。A さんに対しては 2012 年 1 月から 2014 年 8 月までに計 9 回のインタビュー調査を行った。また、施設 Z を退所してから 2018 年 3 月までに計 6 回のインタビュー調査も行っている。なお、調査にあたり同意書を取り交わしたうえで協力を得るなどの倫理的配慮をしている。また、本報告は相良（2013）に対し、追加調査を行った上で再度分析および考察をしたものである。

3 結果

分析の結果、A さんは贖罪の脚本 *redemption script* の特徴に類似するような自己物語を展開していた。この贖罪の脚本とは、Maruna（2001=2013）において非行や犯罪から離脱している人々が展開する自己物語の形式とされるものである。他方で、贖罪の脚本を展開する上で、語り手が時に過度な我慢を強いられるなどのネガティブな側面も指摘できた。そこから贖罪の脚本の脆弱さについても伺えた。これらの分析結果を踏まえた上で、離脱にむけた支援のあり方について言及する必要がある。

【参考文献】

- Maruna, S., 2001, *Making Good: How Ex-Convicts Reform and Rebuild Their Lives.*, American Psychological Association Books. (=2013, 津富宏・河野荘子監訳『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」——元犯罪者のナラティブから学ぶ』明石書店.)
- 相良翔, 2013, 「『非行をしない自己』の維持／『夢』への邁進——更生保護施設在所少年の語りからの考察」第 40 回日本犯罪社会学大会報告原稿.
- 只野智弘・岡邊健・竹下賀子・猪爪祐介, 2017, 「非行からの立ち直り（デシスタンス）に関する要因の考察——少年院出院者に対する質問紙調査に基づいて——」『犯罪社会学研究』42 : 74-90.